



日本一人口の少ない町が 地元らしさと向き合った

”町民がつくった”新庁舎建設の基本理念

「ひとにやさしく利用しやすい庁舎」「防災拠点となる庁舎」

「機能性を重視した庁舎」「環境にやさしくぬくもりを感じられる庁舎」



○農山村地域の活性化への貢献・人材の発掘・育成

地元産の杉や桧の伐採・搬出を地元の早川町森林組合へ委託することで、地域雇用の創出・拡大を図った。新庁舎建設途中の上棟時には、町民向けにワークショップを行い、地元産の木材がどのような過程を経て町役場で使用されているかを紹介。建設現場見学会では、町民の利用するスペースでの地元産木材の使われ方を知り、樹種の違い等に直接触れてもらう機会を設けることで、今後の段階的地域力の向上・活性化・人材の育成につながるよう努めた。

○地元らしさのデザイン

受付カウンターは、サイズの違う部材・色・樹種を組み合わせ、地域の観光資源であるフォッサマグナの大断層をイメージするデザインとして製作。また、地元産のすずり石をアクセントとしたパンフレット棚を製作し、木材だけでなく異素材とのコラボによるデザインを行った。

○木材利用の追求

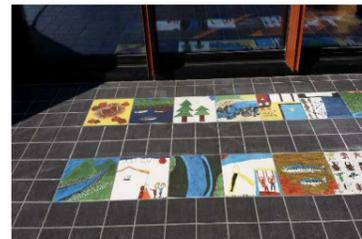
間伐材の利用だけでなく、職人不足により森林の手入れが行き届かず、枝打ち等が頻繁に行われないことで、節が多く構造材としては使用できない材木や、梁等構造部材とする芯部以外の部分を家具や内装材として積極的に使うことで、木材利用の可能範囲を広げた。

○町の将来へつなげる

将来この町の主役となるこどもたちに、町の四季をイメージする絵を描いてもらい、外構タイルへ転写し使用することで、町の未来へ人をつなげるストーリーに取り組んだ。

○森林保全や地球温暖化への貢献

森林保全、地球温暖化防止のため、森林伐採後は、企業の森として活用され企業社員やその家族と共に苗木の植樹及び森林の整備・再生に取り組んでいる。建築的には天井の高い議場兼多目的ホールを床吹き出し空調とし、室内空気環境の改善・省エネルギーに配慮している。



建築作品部門

低炭素社会の推進

森林・水・生態系などの自然資源の保全と活用

山梨県早川町

早川町役場新庁舎

山梨県の南西部に位置し、南アルプスの山々に囲まれた自然豊かな町、早川町。町の面積の96%を森林が占め、過疎と高齢化が進行する「日本一人口の少ない町」である。本施設は、その町で50年以上の間、地域に大切にされてきた旧庁舎の建替えて、地下1階地上2階建て、勤務する職員は約40名。1階は主に執務室、2階は多目的に利用できる議場兼多目的ホール、地下は防災備蓄品などを収納する倉庫としている。土砂災害の危険が否めない地域であることから、安全面に配慮し、地下及び1階はRC造、2階を木造とする混構造とした。木材の使用箇所にはメリハリをつけ、来庁者が主に利用する公共エリアで重点的に木材を使用した。構造材や内装材、木製品には、地元早川産及び山梨県産の木材を用い、建設途中の上棟時には、町民を対象に木造建築に触れてもらうワークショップを催し、真の地産地消を追求した。



応募代表者：長井 隆志
株式会社 佐野建築研究所
設計者他：長濱 和代 山下 公敏
家具製作者：株式会社イトーキ

今回、設計者に与えられた課題は「早川町らしい庁舎にしてほしい」ということだった。早川町らしさとは何であろうと考えあぐねた結果、私が辿り着いた「早川町らしさ」とは、町長さんを代表とするこの町の方々の「素朴な暖かさ」と日本一人口の少ない町といいながら「凛として胸を張り前を向く、精神性の高さ」であると。「素朴な暖かさ」は、地元の木材で表現し、「精神性の高さ」は建物外観で「凛とした立ち姿」として表現した。そして何よりもこだわったのは、「素朴な暖かさ」を受け継ぐこの町のこどもたちに、庁舎建設に関わってもらうことでの「人づくり」。今後、こどもたちが成長し、町の行政がさらに充実することで、「早川町らしさ」が増えてゆくものと考えている。